

2024 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 夕子
研究テーマ	10 世紀における貴族の信仰—藤原忠平の仏事と行業を中心に—
研究概要	10 世紀の人々の具体的な信仰を明らかにするため、藤原忠平の日記『貞信公記』のなかの忠平個人の仏事、行業を考察する。忠平の仏事の対象は、父祖に関するものと、忠平自身や彼の家族（室、子息等）に対するものであった。忠平の仏事の目的と行業の考察を通して、忠平個人の、そして撰聖家一族として仏教との関わりを明らかにしていく。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>本年は平安時代の貴族、藤原忠平（880～949）の日記『貞信公記』から忠平の仏教信仰を考察した。忠平は、災いをはらいのける手段の1つとして仏教を信仰していた。病気のような悪い不測の事態への対応として臨時の仏事を行い、日常の平安を願って定期的に仏事を行っていた。忠平の信仰の対象には、星に関する仏教信仰があった。しかし、阿弥陀如来や弥勒如来、観音菩薩などのような個別の尊格を対象とした信仰の記事は残っていなかった。また、忠平は天台座主のような地位の高い僧侶や才能にあふれた僧侶との交流があり、当時、最先端の教学や密教修法を入手できる状況にあった。しかし、仏教の教義を学んでいた記事は残されていない。そして、継続的に自ら念仏を行ったり写経したりというような、自分で仏教的な行業を行った形跡は残っていない。以上のことから、『貞信公記』に見られる忠平の仏教信仰は、現世利益的な観点からの信仰が主であった。また、僧侶に密教修法や読経をさせることはあったが、主体的に自ら行業を行ったり、仏教を学んだりということではなく、間接的で受動的な傾向の強い仏教信仰であったことが指摘できる。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>[論文等] 単「藤原忠平の仏事と行業」『印度学仏教学研究』第 73 巻第 2 号、日本印度学仏教学会編（刊行日未定、査読有）</p> <p>[発表] 単「藤原忠平の仏事と行業」第 75 回日本印度学仏教学会大会（2024 年 9 月 8 日、駒澤大学）</p>
3. 今後の課題今後の課題	<p>10 世紀の在家者の信仰の実情をさらに明らかにするため、今後は藤原忠平の子息である藤原師輔（908～960）の信仰・行業を主に考察する予定である。師輔の日記『九曆』の仏事や諸資料に収められた師輔の願文等から、師輔の信仰を総合的に検討する。加えて往生伝の 10 世紀の在家往生者の信仰と行業を考察し、『九曆』と往生伝の信仰と行業を比較、検討し、10 世紀の在家者の信仰を多面的に解明する。</p>